

四万十川流域生態系ネットワーク形成の取組

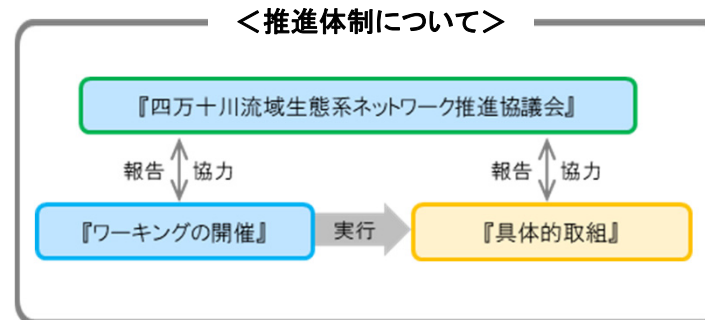
四万十川流域生態系ネットワーク推進協議会

四万十川流域生態系ネットワーク推進協議会（2019年12月設立）では、ツル類を指標種に設定し、2021年度に四万十川流域生態系ネットワーク全体構想を策定しました。全体構想では、2050年を到達目標として、短期目標、中期目標を設定しています。現在は、短期目標の達成に向けて、「四万十川流域生態系ネットワーク 短期目標の達成に向けた取組（2021年～2025年）」を策定し、具体的な取組を進めています。



「第3回四万十川流域生態系ネットワーク推進協議会」の開催の様子

協議会構成員
四万十市 市長
四万十市教育委員会 教育長
四万十市区長会 会長
中村商工会議所 会頭
一般社団法人四万十市観光協会 会長
一般社団法人中村青年会議所 理事長
四万十つるの里づくりの会 会長
四万十川自然再生協議会 会長
高知野鳥の会 会長
国土交通省 中村河川国道事務所 所長



四万十川流域生態系ネットワーク形成の目的

- 1 ツル類を指標とした河川と取り巻く地域が一体となった自然環境の保全と再生による生態系ネットワークの形成
- 2 ツル類を指標とした生態系ネットワークの形成を通じた地域活性化及び経済振興の実現

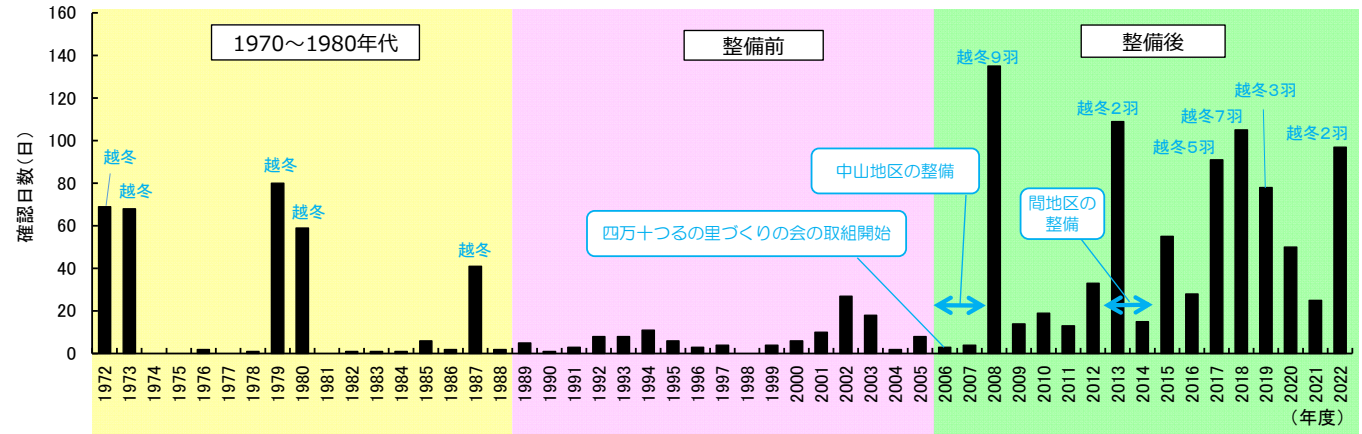
短期目標(～2025年)	中期目標(～2030年)	到達目標(～2050年)
<p>ツル類の安定した越冬環境づくり</p> <p>これまで取組が行われてきた江ノ村地区、ツル類の飛来実績が多い森沢・間地区において、農業者の理解、協力を得て、冬期湛水等のねぐら環境の創出や、二番穂の確保等の採食環境の創出が行われている。</p> <p>また、地域住民等の理解、協力を得て、ツル類への人為的なストレスが低減されている。</p> <p>これらの取組により、四万十川流域で越冬できるツル類の個体数が増えている。</p>	<p>江ノ村地区、森沢・間地区において、ねぐら環境・採食環境の創出、人の利用の調整が、ツル類を活かした農業振興や観光振興も相まって、継続されている。</p> <p>また、流域内のツル類の生息ポテンシャルが高い地区でも、農業者や地域住民等の理解・協力を得ながら、生息環境づくりが進められている。</p> <p>これらの取組により、四万十川流域でさらに多くのツル類が越冬できるようになっている。</p>	<p>四万十川流域で、河川を基軸とした生態系ネットワークが形成され、「宝」である生態系と歴史・文化・伝統を活かした産業が営まれている。</p> <p>ツル類を指標とした四万十川流域での取組から、幅多地域の生態系ネットワーク形成へ取組が展開されている。</p>
<p>ツル類を活かした地域・人づくり</p> <p>江ノ村地区や森沢・間地区において、農業者の理解・協力を得ながら、ツル類が飛来・越冬することによる農産物の付加価値化が進められている。</p> <p>地域住民等の理解、協力を得ながら、観光利用でのルールの設定や受け入れ体制の構築が行われ、来訪者の受け入れが始められている。</p> <p>地域内外への情報発信や普及啓発の継続により、四万十川流域の「つるの里」としての認知度が上がっている。</p>	<p>ツル類が飛来・越冬することによる農産物の付加価値化が継続して取り組まれ、地域内外への流通・販売が展開されて、経済効果を上げている。</p> <p>地域の事業者等との連携・協働により、ツル類を活かした観光が行われ、経済効果を上げている。</p> <p>地域内の多様な主体が参加・協働する取組になるとともに、地域外の人や組織との連携・協働が進み、地域の関係人口が増えている。</p>	

四万十川流域におけるツル類の飛来状況

四万十川自然再生事業の一環として、2002年度から「ツルの里づくり」の取組を行っています。取組を開始してから四万十川流域におけるツル類の確認日数、越冬は増加しています。2017年度にナベヅル等5羽、2018年度にマナヅル7羽、2019年度にナベヅル3羽と3年連続で越冬を確認できましたが、2020年度、2021年度は越冬しませんでした。2022年度は、3年ぶりにナベヅル2羽が越冬しました。飛来するツル類に対し、越冬個体数は未だ少ない状況にあります。



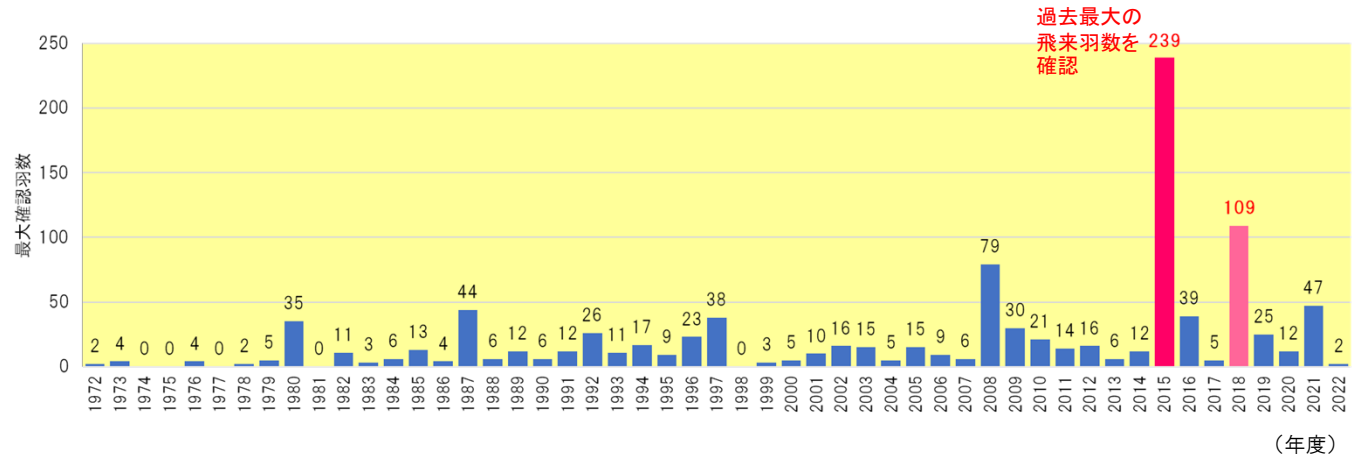
2013年度に河道内の人工的に整備した中山箇所越冬したマナヅル2羽



四万十市におけるツル類の確認日数の推移



観測史上最大数が飛来した2015年度のナベヅルの状況



四万十市におけるツル類の最大飛来羽数の推移

取組内容：自然再生事業でのねぐら環境の整備

四万十川流域においてはツル類の飛来頻度、飛来個体数が増加しているものの、主要なねぐらである四万十川の砂州周辺での落ちアユ漁、狩猟等の影響により、11月中旬以降には他地域へ飛び去る個体が増加し、越冬に至る個体数は極めて少ない状況です。そのため、複数のねぐら環境をつくることで、越冬個体数を増やそうとしています。四万十川自然再生事業では、ツルがより利用しやすいねぐら環境の整備を進めています。

◆自然再生事業地(中山箇所)



◆自然再生事業地(間箇所)



自然再生事業地の中山箇所と間箇所では、これまでねぐら環境とえさ場環境となる湿地を創出してきましたが、ツルがより利用しやすいねぐら環境として改良を行っています。

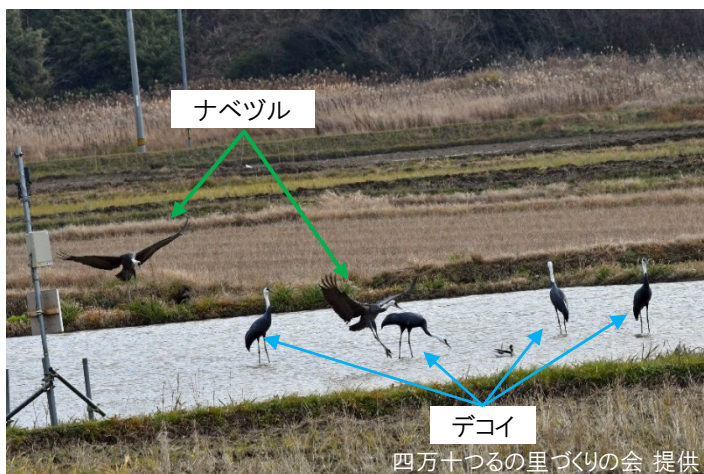
取組内容：堤内地での代替ねぐらの確保

希少種情報につき取扱い注意

地域の方々と協働・連携して「ツルの里づくり」の取組を進めています。堤内地の田んぼで冬期に水を張ることによって、代替ねぐら環境をつくっています。2022年度は、江ノ村箇所①でナベツルのねぐら利用が確認され、効果が認められました。今年度も、江ノ村箇所①、江ノ村箇所②、実崎箇所の3箇所で行っています。



2022年度の江ノ村箇所①の水張りとデコイ設置の状況



江ノ村箇所①に飛来したナベツル2羽
(2022年12月22日撮影)

希少種情報につき、委員のみ

取組内容：デコイの設置

代替ねぐら環境の創出箇所には、ツル類を誘引するためにデコイ（ナベヅルの模型）を設置しています。東中筋小学校5年生、6年生を対象とした授業の一環で、代替ねぐらの江ノ村箇所①、江ノ村箇所②にナベヅルのデコイを設置しました。江ノ村箇所①には立体型デコイを設置し、江ノ村箇所②には児童が色を塗って作製した平面型デコイを設置しました。



四万十つの里づくりの会からの説明



中村河川国道事務所からの説明



ナベヅルの立体型デコイの設置



児童が色を塗った平面型デコイの設置

取組内容：理解と関心の醸成

四万十川流域生態系ネットワーク形成の取組を啓発するために、高知県立のいち動物公園や四万十市役所及び市内の商業施設でのパネル展・写真展を実施しました。



高知県立のいち動物公園でのパネル展示



四万十市役所でのパネル展示



商業施設での写真展

また、四万十川・中筋川流域がツル類の飛来する貴重な環境であることやツルの里づくりの取組を知ってもらうため、毎年「四万十つるの里祭り」（主催：四万十つるの里づくりの会）を開催しています。四万十つるの里祭りでは、四万十市立東中筋小学校の児童によるツルの学習内容の発表やツル観察バスツアーなどが行われます。今年度は、2023年11月25日（土）に「第15回四万十つるの里祭り」が開催されました。



祭りにぎわい



東中筋小学校6年生によるツルの学習発表



ツル観察バスツアー
(この日はツルがいなかったため、
野鳥の観察を実施)